「おふでさき」の標石的用法（36　最終回）

松尾市兵衛と「おふでさき」

天理大学非常勤講師
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

「おふでさき」は特定の人を念頭に置いて考えると捉えやすい歌がある。松尾市兵衛に着目してみていきたい。

松尾市兵衛の信仰は、元治元年（1864）30歳のときに、妻はるの産後の患いを教祖にたすけて頂いたことにはじまる。それから5年後の明治2年に執筆された「おふでさき」二号43―45の註に市兵衛についての記述がある。

なにもかもごふよくつくしそのゆへハ
神のりいふくみへてくるぞや（二号43）
たん〳〵と十五日よりみゑかける
善とあくとハみなあらハれる（二号44）
このはなしとこの事ともゆハんてな
みへてきたればみなとくしんせ（二号45）

「註　以上三首に関連する史料としては、明治五年大和国東若井村の松尾市兵衛の話が伝えられている。市兵衛はお道に非常に熱心で、立教当初は高弟の一人として教えの取次に尽していたが理くつっぽくて気の強い人であったから、肝心自分の事になると親神様のお諭しを素直にそのまま受け容れる事が出来なかったので、親神様からお手入れを頂いていたその長男は盆の十五日に迎え取りになった。」

松尾市兵衛の性格に関して赤裸々に記されている。長男楢蔵が「盆の十五日」に出直したとあるが、『“逸話のこころ”たずねて―現代に生きる教祖のおしえ』（道友社編）を読むと、出直したのは明治7年7月15日のようである。逸話篇の25・26・27に詳しく記されているが、楢蔵のおたすけのために明治5年、75歳の教祖が松尾宅に赴かれ13日間滞在されている。楢蔵は学問が好きで「将来は大阪や京都へ出て勉強したい。この家は二男に譲る」といって一日中机に向かっているような性格だった。そのような楢蔵を市兵衛はとても可愛がっていたのだが、明治5年15歳頃に結核を患い寝たきりになってしまう。市兵衛は教祖におたすけを願った。

松尾宅に行くに際して、教祖は「ためしやで」と仰せられて、75日の断食中にもかかわらず、駕籠にも乗らずに16キロの道のりをご自分で歩いて行かれた。楢蔵の病気のおたすけのお願いに際して、「どうなる事やらわからんが行くことにしよう」とも仰せられたそうである。

滞在2日目。楢蔵の気分も優れ、教祖の部屋にご挨拶に行った。そのとき教祖は「楢蔵さんや、自分の体と学問と、どちらが大切やと思う？」と尋ねられたので、楢蔵は「体です。しかし学問も大切です」と答えた。すると教祖は「体を大切にすることは親孝行の第一歩や、親に安心させてあげなされ」と諭された。そのときの状況を考えると、大変不思議なお諭しに思える。というのも、常識的に考えると、断食をしている教祖自身が自分の体を大切にしているとは見えず、実際周りの人は75歳の御身を気遣って再三食事を勧めていたからである。しかし、教祖は「わしは、今、神様の思召しによって、食を断っているのや。お腹は、いつも一杯や」とか「おまえら、わしが勝手に食べぬように思うけれど、そうやないで。食べられぬのやで」と仰せられて、神一条の態度を示された。こうした状況を考えると、「体を大切にする」というのはただ単なる健康志向ではなく、親神の思召に沿って、親に安心してもらえるように身体を使うこととして捉えることができるかもしれない。それからも、教祖は度々楢蔵の部屋に赴かれて、種々とお仕込み下さったようである。

滞在中のある朝、市兵衛夫婦に、「今日は麻と絹と木綿の話をしよう」といって、布の性質を例にとって、心の持ちようを諭された。「形がのうなるところまで使えるのが、木綿や。木綿のような心の人を、神様は、お望みになっているのやで」という諭しは、先述した註での市兵衛の性格を思い合わせると、本人が悟りやすいように喩えを用いて諭していると解される。

滞在10日目の朝、教祖は市兵衛夫婦に「神様をお祀りする気はないかえ」と仰せられた。夫婦は戸惑いつつもその言葉にしたがって、急遽神床を造ることにした。それから2日後の夕方には完成し、その翌朝教祖は、新しく出来た神床の前に、ジッとお坐りになって、「ようしたな。これでよい、これでよい」と仰せられた。それから楢蔵の部屋に赴かれて「頭が痒いやろうな」といってその髪をゆっくりと梳かれた。秀司が来て、御幣を造り、教祖がみずからそれを神床に運んで、祈念された。そして、「今日から、ここにも神様がおいでになるのやで。目出度いな、ほんとに目出度い」といってお屋敷に帰られたのである。楢蔵は、翌明治6年には畑仕事を手伝うまでに回復した。その翌年の明治7年に「おふでさき」五号が執筆されたが、その56―57の註に松尾市兵衛が登場する。

けふの日ハなにがみへるやないけれど
八月をみよみなみへるでな（五号56）
みへるのもなにの事やらしれまいな
高い山からをふくハんのみち（五号57）

五号は明治7年5月の執筆とされ、同じ年の陰暦10月に、市兵衛は仲田儀三郎と共に大和神社へ問答に行っているのであるが、そのことに関する歌とされている。これをきっかけにして、陰暦11月には教祖ご自身が山村御殿に赴かれて、「学問に無い、古い九億九万六千年間のこと、世界へ教えたい」と神職たち伝えている。ところで、この山村御殿での出来事の前、つまり明治7年7月15日（陰暦6月2日）に、市兵衛の長男楢蔵が風邪をこじらせて出直していた。このときの「学問に無い」というお言葉は市兵衛も伝え聞いたと思われるが、学問好きであった楢蔵を思い合わせると、市兵衛はどのような心境だったであろうか。

それから、2カ月ほど経った明治7年12月に六号が記されているが、その21の註に市兵衛が登場する。

にち〳〵に神の心わせゑたとて
人ぢう十人そろいなけねば（六号20）
十人のなかに三人かたうでわ
火水風ともしりそくとしれ（六号21）

「註　かたうでは、片腕の意。東若井の松尾市兵衛、竜田の乾勘兵衛、大西の北野勘兵衛の出直しを見て、当時の人々は、このお歌に思い当たったという。」

この歌から4年後、市兵衛は病気にかかり、翌年に出直した。その信仰は次男輿蔵に受け継がれ、平安大教会のもとになっている。教祖は松尾市兵衛への仕込みを通して、我々に何を伝えたいのであろうか。

今回で連載が最終回となった。途中読むに堪えないものも多々あり、汗顔の至りではあったが、少なくとも月に一度は「おふでさき」に向き合う時間を得られて私自身は大変貴重な体験となった。長いあいだ誌面をお借りできたことに感謝したい。ありがとうございました。